

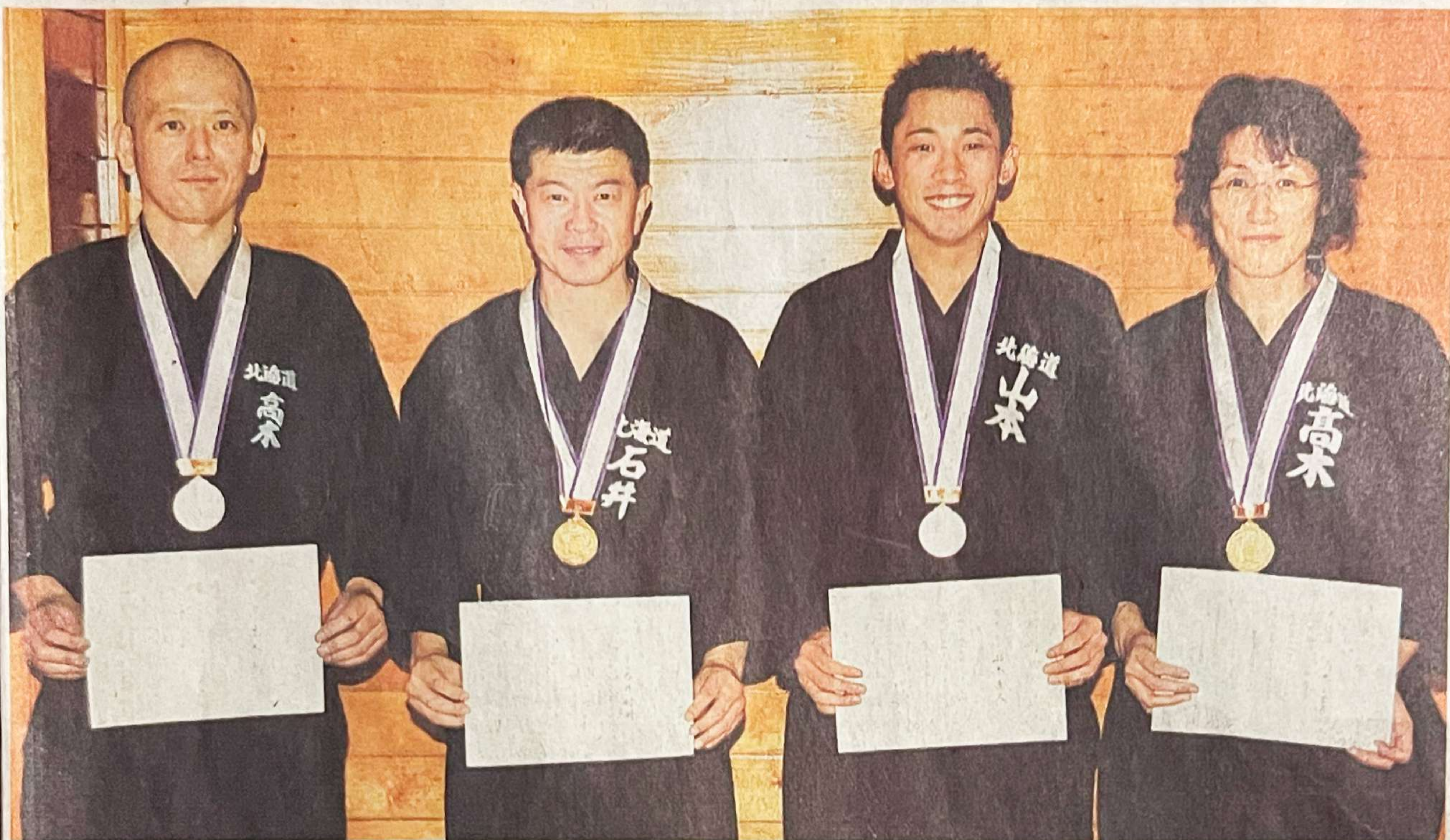
杖道の第40回全日本大会（6日・札幌市の道立総合体育センター、全日本剣道連盟主催）で、三段の部に初出場した全十勝剣道連盟杖道部会（鈴木清志部会長）の高木誠（39）＝音更＝が、札幌の細沼哲也（40）とのペアで優勝に相当する優秀賞を獲得した。二段の部はともに同部会の石井利明（52）＝帯広＝・山本直人（26）＝音更＝、高木万里子（47）＝同＝・名野まい（32）＝鹿追＝の2組が優秀賞を独占した。

（小寺泰介）

全日本杖道

十勝勢5人優秀賞

優勝に相当する2人一組息ぴったり



全日本大会で優秀賞を受けた高木誠、石井利明、山本直人、高木万里子（左から）

杖道は2人一組で取り組む形稽古が基本。長さ128センチ、直径2・4センチのつえを武器に、太刀、やり、なぎなたの各技に独自の動きを加味しながら行う。全日本大会では審判員3人が正しい姿勢、打突、氣勢、技の充実度などを審査し、2人以上旗の上がつた組が勝つ。初段から七段までの7部門に分かれ、トーナメント戦を実施。初段から三段までは決勝を行わず、上位2組を優秀賞として表彰している。

高木誠はペアの細沼と居住地が離れているため、札幌への強化出稽古も重ねて大会に臨んでいる。初段時から毎年2人で出場し、計3回（初段1回、二段2回）、優秀賞を獲得。「離れていても息はぴったり」と胸を張る。

今年は昇段して初めての年だった。足の使い方にルール変更があり、戸惑いも

ある中で「鏡を見ながら改めて姿勢を徹底した」という。レベルの高い試合でも接戦を勝ち抜き、二段時に続く3年連続の優秀賞を手にした。三段での同賞は北海道勢としては10年ぶりで、「今後もステップアップしていきたい」と意欲を新たにしている。

二段の部の山本は剣道の有段者、石井はフルコンタクト空手の選手だが、「相手の動きをよく見てどう動かすかを考える形武道は、他競技にも生かせる」と門をたたいた。ペアを組んだのは2カ月前。石井にとって初回の公式戦も堂々とした戦いぶり、最終戦も減点なく3-0で完勝した。

身長差は2センチしかなく、「突き技などを無理しないですぐに自然に出せる。親子ほど」の年の差だったが、最高のパートナーだった」と互いをたたえる。11月に昇段審査を控える石井は「来年は三段で上位に行きたい」。山本は「二段でもう一度、優秀賞を」とそれぞれ精進を誓った。

高木誠と夫婦で杖道に取り組む高木万と、名野は前回初段に出場し、惜しくも準決勝で敗退。「リベンジしたい」と燃えて昇段し、優秀賞を勝ち取った。名野は大会1カ月前の練習中に右足を負傷し、追い込み稽古ができなかったが、この間に高木万の慢性的な右肘の痛みも完治。「けがの功名ですね」と笑う。2人は4戦全試合3-0で完勝。

「お互いを信じて盛り上がった。呼吸が一つになれた瞬間だった」とうなずき合った。



2人一組での形が審査される杖道（高木誠、高木万里子による稽古風景）

全十勝剣道連盟杖道部会は、毎週日曜日午後6時から同8時45分まで帯広の森体育館で練習している。常時、入部を募集中。問い合わせは、事務局の三戸部良太さん（090・9756・3840）へ。

卷之四

ソチ五輪
長島、辻、古
あすから全日
スピードスケートの今季開幕戦となる第20回全日本距離別選手権（日本スケート連盟主催）が25日から3日間、長野県長野市のエム・ウエーブで開かれる。来年2月のソチ五輪を見据えるとともに、ワールドカップ（W杯）前半戦の派遣選手が選考される重要な大会。男子97人、女子73人がエントリーしている。

層の厚い男子短距離は長島圭一郎（日本電産サンキョー・日大、池田高出）、及川佑大和ハウス工業・山梨学院大、池田高出）、羽賀亮平（日本電産サンキョー・日大、白樺学園高出）、加藤条治（日本電産サンキョー）らに、長谷川翼（日大

卷之四